

丹生のみち、共感の精錬

坂口立考

* アルマデンを訪ねて

乾き切った薄黄土色の土地が夏の日差しを反射して眩しい。山路の入り口際の広い駐車場には何台か車がとまっているが、あたりに人影はない。妻が私に語りかけた声が静けさの中に吸収されたかと思うと、今度は地面を擦る自分の足跡が聴こえてくる。ゆるやかな山路を登り始めて間もなく、路の両側を守るブナのアーチ空間へ引きこまれた。泰然とした太い幹が、角張った直線からしなやかな曲線に変わる姿。まるで胴体が肩、腕先に注ぎ込まれ、さらに繊細な指先へと流れ込んでいくかのようだ。木漏れ日がラクダ色の地に焦げ茶の縞模様を映し出し、地面が和らいでいる。風は樹々の軽やかな舞踏となり、無数の葉がいつせいに思い思いの躍動を表現している。気温は三十度近いが、森の乾いたそよ風に包まれている感覚が心地よい。静かに息を吸い込むと、どこか葉草のような独特の香りがほんのり漂ってくる。

頭上を見上げると葉に覆われた天井の隙間から蒼い空が見える。再び少しずつ目線を下げると、太い枝ぶりは影絵のように黒々として輪郭がくつきりと浮き出ている。目が慣れると葉の色は同じ緑色でも深さの違いや微妙な彩が重なっていることに気づく。すぐ近くに目を遷すと、三枚葉

の小さな植物の深紅が目の中が飛び込んできた。緑と赤の強烈な色彩のコントラスト。ポイズンオーク（カリフォルニア蔦漆）だ。うっかり素肌で触れると、ひどいかぶれを引き起こすことで知られる。通り過ぎて、同じ目線を維持して歩いてゆくと、今度はカリフォルニア特有の「枋の木」があちこちに現れる。バックアイ（雄鹿の目玉）と呼ばれるつるりとした実を包んだ、若い梅のような球が枝の先にくっついている。茶褐色のシワシワ和紙が、すっかり乾燥してカリカリになったかのような葉っぱが木に張りついたまま息を潜めている感じだ。あたかも枯れたような姿ながら、暑い夏を乗り切るためにエネルギー消費を最小限に抑えて身を守る「休眠」の姿勢を取っているのだ。植物の自然なふるまいによる不思議な光景もさることながら、深緑に赤く際立つ対照美に、「あをによし」という色彩情緒のことが脳裏に浮かんできた。

いま、アルマデン水銀鉱山遺跡自然公園にいる。この夏、三度目の探訪である。国定の歴史文化遺産地域全体がそのまま、生態系の保護を目的とした自然公園・ハイキングトレイルになっている。サンノゼ市のすぐ南、自宅から車で三十分足らずの所にある。太平洋と内陸を隔ててシリコンバレーの谷側地帯を形成するサンタクルス山脈は、一番高い地点で標高千メートルあまりの起伏・丘陵地帯が百キロほど連なっている。丁度、正方形の対角線の角度で北から南に、西から東にむかつて斜めに伸びた尾根。その付

け根あたりの北麓に、廃鉱遺跡となったアルマデンがある。左手を差し出して地形に見たててみると直感的にわかるかもしれない。親指の先から付け根までがサンタクルス山脈とすると、内側にゆるやかな麓地帯ができる。手のひらがシリコンバレー、手首に近い、手相でいう「生命線」の終わりあたりに、アルマデンがあるという位置関係だ。面積十七平方kmの鉱山の村。

カリフォルニアに移住して七年あまり、週末には山野辺の路を歩いてきた。振り返ると五百回あまり、このサンタクルス山麓丘陵地帯のどこかを散策してきたことになる。ところが、アルマデンにはこの夏まで訪れたことがなかった。いつでも来られるはずなのに、先延ばしにしてきた理由は何だろう。ふだんのトレイルは、標高二〜三百メートルほどの丘陵だが、ここは五百メートルぐらいの小高い山へのぼる起伏あり、たつぷりと歩き甲斐がある。一度では堪能しきれない。しかしそれ以上に、あるたのしみをまとめて「とつておいた」という気がする。カリフォルニアの歴史、そこに映る文明の象徴、人間の営みの証がここに凝縮している。自然な誘いを待って、知的好奇心と想像探訪の、ほどよい時が訪れるのを待っていたのだと思う。端的に表現すると、ここは、丹（に）の生まれるところ。丹生（にう）に関わるあらゆるイマジネーションを精錬し、ひとつの自覚に仕上げたかったのだ。

丹とは、辰砂、あるいは丹砂、朱砂と呼ばれる、朱色の鉱石のこと。古来より、文明の興亡、人間の歴史・文化に特別な影響を与えてきた希少資源である。硫化水銀（朱）と水銀（ミスカネ）。地球という私たちの住処にはごくわずかしかない特殊な鉱物が、人間のいのちの営みとも、想像の世界とも、縁の深い関わりを持つてきた。そして何よりも、日本列島の古代から現代までの歴史形成においても重大な役割を担い、各地に刻印を残してきた鏡のような存在であると思う。顔料としての朱は、旧石器時代の洞窟壁画にも、古代エジプト王家の遺室にも、カリフォルニア先住インディアン・オローネ族の生活用品にも使われてきた。日本の縄文後期の土器にも、古代の墳墓石室にも鮮やかな朱色が使われている。三国志・魏志東夷伝の描く倭人の国・邪馬台国は、冒頭に「其山有丹」と明言される。辰砂とは、中国の湖南省、隋の時代に辰とよばれた州の砂で、英語ではシナバル（cinnabar）と呼ばれる。「朱」ということばが頭の中をぐるぐると駆け巡り、オークの深緑と毒ツタウルシの深紅の対照色彩に触発されて、私は以前訪れたポンペイ遺跡のある壁画を思い出した。「ディオニュソスの秘儀」に描かれた強烈な水銀朱の深紅が深緑の縁で際立っている。奈良の都の枕詞「青丹よし」とは、色彩コントラストにハッと驚く表現だったのだろうという想像も湧く。

アルマデンという名称は、スペイン中南部の名家アルマデン水銀鉱山にちなんで命名されたもの。古代ローマ時代から二千年以上に渡って世界に水銀を供給してきた世界最大の水銀鉱山である。アルマデンとは鉱山という意味のアラブ語である。何世紀にも渡ってイベリア半島を支配したアラブ時代はスペインにとりわけ多くの地名を残したが、人の移動、技術の伝播とともに、「アルマデン」もカリフォルニアに到来した。できた町の名が新アルマデンである。この地では、先住のオローネ族が数千年前から、水銀朱を日常生活にも経済活動にも利用してきたのだが、十九世紀半ば、メキシコ領時代の最後に転機を迎えた。メキシコの騎兵隊長が水銀朱鉱床を「発見」し、水銀生産の目的でメキシコ政府が資金を出した矢先に、米墨戦争が勃発した。その結果、戦勝国にカリフォルニアが割譲された。しかも、時をほぼ同じくして金鉱が発見され、一気にゴールドラッシュとなつて世界中から人が集まつてきた。その勢いでカリフォルニアは合衆国の州に昇格した。それが奇しくも、三度目のアルマデン探訪の今日、一八五〇年九月九日である。ゴールドラッシュでカリフォルニアという国が誕生し、アルマデン水銀の役割は一層重要なものになった。金の採掘に水銀は必要不可欠だったからである。

水銀は常温では液体状の重金属で、その名の通り、液体の銀、あるいは銀の水である。ふだんは硫黄と化合し硫化水銀として地下に眠っている。それが辰砂・朱砂と呼ばれ

る水銀朱鉱床である。天然水銀は、目にも不思議なふるまいをする。英語ではクイックシルバー (quicksilver) とも呼ばれるが、水のように流れ、素早く動く。元素周期表で水銀(Hg)は80番、その隣が81番の金。ちなみにHgという記号は、液体の銀を意味するギリシャ語由来のラテン語ヒュドラルギウム (Hydrargyrum) から来している。ローマの女神からマーキュリー (Mercury) の名前が水銀にも水星にもあてられているが、両者には共通点が色々ありそうだ。水銀は重くて速く、美しい。表面張力が強いので鉄の容器も濡らさない。その一方では、他の金属を溶かして自ら合金となる。加熱されると液体から、沸点三百五十度で気体に変わり、冷やされると元の姿にもどる。何年前かに、メキシコの古代文明テオティワカン・ピラミッドの発掘調査で、「地下の世界」が発見され、天然水銀の湖で「あの世」が造形されていたという話があつたが、それは不老不死を希求した秦の始皇帝の棺のそばに水銀の川があつたという史記の記述を裏付けるものだろう。人間の目の前でこれほど不思議な現象を披露してくれる金属は他にない。手で掬えば銀の水が滴り、それを貯めれば鉄の玉がぶかぶかと浮かぶ。

辰砂は硫化水銀(HgS)すなわち硫黄と化合した水銀である。これを加熱すると水銀と二酸化硫黄が蒸気になり冷やせば水銀が分離できる。たいてい化学式といえばややくしに見えるものだが、「 $HgS + O_2 \rightarrow Hg + SO_2$ 」はゆっくりに眺

めると単純明快に見える。この性質を利用して金との合金をつくり、そのあとで水銀を蒸気にして飛ばしてしまえば、金だけが残る。これが古来よりメッキ（鍍金）として知られた技法である。合金はアマルガムと呼ばれ、奈良の大仏建立にも大量の水銀が用いられたことは有名だ。金の採掘にも同じ原理が利用された。水銀で金を吸い寄せて、いったん別の物質にした後で、水銀を気化させて金を取り戻すわけである。ゴールドラッシュの時代、金の採掘にこの技法は欠かせなかった。水銀鉱床のそばに都がつけられたというカリフォルニアの近代史は、日本の古代をも彷彿とさせる。

日本は丹の産地すなわち水銀朱という地下に眠る天然資源を探しあて、それを採掘して精製した技術と産業経済史の宝庫でもある。王権と仏教建築物という大きな需要を支える経済基盤と先端テクノロジ、それを担う特殊技術集団の移動、そして信仰の伝播。日本列島には、その克明な足跡が刻まれている。纏向遺跡は日本中から人ともものが集まり、そこから初期王権が発祥した。それ以外にはこれといった天然資源もなさそうな大和の地に財力が蓄積された最大の理由は、そこでしか採れない特別な地下資源を独占できたからだと考えると色々な疑問も氷解する。宇佐も大和も伊勢も高野山も、水銀鉱脈の上にある。中央構造線と呼ばれる断層に沿って「丹の道」が東進した足跡は、紀伊半島を中心に全国で百をゆうに越える丹生神社にはもちろん、

日本各地の八幡神社や修験道に残っている。アルマデンの場合、「東遷」ではないが、西欧近代の金属精錬集団「西遷」になぞらえることもできそうだ。

アルマデンを最初に訪れた時、山の東側の入り口から歩いた。はじめにオークの木陰があり、広い坂道へと続いていく。あたりは小麦色一色だ。強い日差しから身を守ろうとする草木の休眠姿勢の色。ふだん歩くトレイルと同じ景色だ。小一時間、起伏のある道を何度か登り降りして、見晴らしのよい頂に出た。すぐ下に、赤茶色の大きな建物が見える。あたりを見回すと、赤茶けた岩石の山があり、採掘井戸の遺構があった。そこに古い写真の載った説明書きがある。眼下の建物は「イングリッシュタウン」の学校である。鉱床の真上に建てられた校舎を背景に勢揃いした鉱夫とその家族。日本ではちやうど明治維新の頃だ。アルマデンには二千人ほどの鉱夫とその家族でふたつの町ができたという。ひとつは、イングリッシュタウン。その名のごとく、英国最南・最西の町、コーンウォールからの移民。もうひとつがスパニッシュタウン。メキシコ、チリ、アルゼンチンからの移民だが、彼らのうちには、すでにカリフォルニアの「住民になつていた人たち」も含まれる。山の上と山の下ふもとに町ができた。校庭隅の木陰に分厚いオーク板のベンチがあり、そこに腰掛けて弁当を食べながら思いを馳せた。コーンウォールは古代より金属精錬の町であったし、メキシコもチリもアルゼンチンも、もとも

と、新大陸への鉱業移民が多かった。それらの産地からやってきた人たち。移民は技術集団の移動、文化の移動、そして地名の移動を意味する。

二度目の散策は、北の入り口から入った。森の中の細い山路をゆく。小さな谷に差しかかった所で、青く透き通る小さなトンボが一瞬現れたかと思うとすぐに視界から消えた。深緑の岩石が所々に顔をのぞかせている。石の表面が歩く人の靴底で擦れて、乾いた土の中で日光を反射して青く光っている。これは蛇紋岩。カリフォルニア州の岩石と言われる。足元に注意を傾けて歩くと、角張って白っぽい石も目につくようになった。いくつかを拾ってよく眺めてみると、深緑部分と白色部分に赤茶色が混ざり込んでいく。あるいは白色の中に赤茶色が流れ込んでいく。あるいは深緑にすこしだけ白い斑点がついている。どれもみな大きな岩石の一部分である。鉱床は火山活動によってできるが、断層とよばれる大地の切れ目に鉱物の溶けた熱水が入り込むことで形成される。数十億年前の地殻変動・火山活動でカリフォルニア海岸ができ、数億年前に地球内部のマントルから吹き出たかんらん岩に熱水が入り込み、蛇紋岩床を形成した。そのまわりにシリカ・カーボネイトと呼ばれる白色の岩石が融合している。1億年ほど前、水銀を含んだ熱水がその断層に流れ込んで水銀鉱床ができたと言われる。地球の歴史そのものがこの素手の中に凝縮されている。じぶんが地球だったら、この岩石は皮膚の一部であ

り、また来歴の記憶なのだろう。

三度目は、南の入り口から。アルマデンの西側から南側の谷の道路を通ってきたので、全体像がだいぶわかってきた。冒頭に書いたオークの小森を抜けると、車の往来ができるほどの太い道に出た。向こうの方に目指す先、スパニッシュタウンの山頂周辺と鉱山の遺構が見える。近づいてみると、それは炉の跡であった。創業開始から七十年ほどたち、世界大戦の需要で新たな技術導入による新型の精製炉ができた。曲がりくねったつづら折りのパイプが冷却器であろうことは一目で想像がつく。山の斜面を利用した大掛かりな装置。道の脇の四角い建物が、蒸気から還元精製された水銀の滴り落ちる貯蔵庫であるに違いない。ここから道伝いにのぼっていった所がスパニッシュタウンである。標高五百メートルぐらいの小高い山の頂上周辺に鉱夫の町があった。いまは跡形もない。威勢よく伸びたサボテンの傍から南東を見下ろすと、わら色の大地の向こうの谷間にエメラルドに光る小さな湖が見える。貯水湖なので人は近寄れない。それにしても、廃鉱の跡がなければ、まさかこの山の地面の下に、九十キロにもおよぶ人工のトンネルが掘られていることなど思いもよらない。地面の上に表れているものが手掛かりになり、その場で思いを巡らせる時に臨場感が生まれてくる。百年前も今も、この地球にある空気分子は変わっていない。時間は地面とそよ風で繋がっているのだ。

山を降りてからの帰路、再びアルマデンの博物館に立ち寄った。水銀事業で栄えた町の統括者の邸宅（カサグランデ）が博物館になっている。小じんまりしているが百三十五年の歴史とこの場所の特徴がよくまとめられている。入つてすぐの所にメキシコの守護神として有名な「グアダルーペの女神」の掛け軸があつたが、それを眺めながら、丹生都比売を祀る丹生神社が日本中に広がっていることに重ね合わせた。過酷で危険な重労働でも女神が守つてくれる。神は、生活の中にいる。アルマデンに関わる新聞記事の大スクラップブックは、長期に渡る鉱山の写真記録でもあり、人々の表情が興味深い。また、鉱床の分布などの地質情報は、十時間分の探訪過程を振り返る手助けになる。鉱脈の上、それもいちばん潤沢な鉱床の真上に人が住み、ふもとにも町ができるのだということが実感できる。オローネ族が使つていた水銀朱の顔料は陳列ケースの中だが、採掘された真紅の鉱石は手に触れることができる。両手で抱えると、見かけから想像する以上の、ずしりとした重力が加わつた。精製された水銀は、フラスコと呼ばれる鑄鉄の瓶に詰められた。大きめの一升瓶のような容器は四キロ半あり、その中に三十五キロの水銀が入る。日常生活にはない重さだ。これが当時四十五ドルしたというが、現在価値に直してみると一本十五万円ぐらいになるだろうか。

いちばん目を惹くものは、初期の水銀精製に使われた大

きな鑄鉄の釜である。地面に穴を掘り、鉄の甕に水を張つて置く。そこへパイプで蒸気を導いて冷却還元された水銀が貯まるように仕掛けをつくる。その頭上に水銀鉱石をのせる鉄製のグリルを置き、全体を鑄鉄の釜ですっぽりと覆う。そして周囲に薪を積み上げて燃やす。明時代の『天工開物』にも蒸気水冷による抽出方式が説明されている。中国での水銀精製は三世紀にはあつたらしいので、私は大和王権の黎明期に水銀生産があつたという説を支持したい。そしてそれは、きつとこのような方式だつたのではないかと想像する（*注 付記）。今こうして、目には見えない不思議な力を宿す資源を採り出し、抽出する精錬作業の現場を歩き、自分自身の想像とつなげてみることで、山ひだの各所に残された地の魂に少し触れた気がする。その思いが新しい想像の源泉になる。カサグランデから鉱山の東側の際に沿つて北へ伸びる当時の目抜き通りを通つて家路につくことにした。家の前にポーチがある西部劇でみるような古風で小さな家並みが、歴史文化遺産地域の一部として今もそのまま保存され、住人がこぎれいに維持しながら住んでいる。すると突然、どこからともなく一頭の子鹿が道路に飛び出してきて、ひと呼吸の間、目が合った。「丹生のみち」の想像を採り出して精錬したい。その気持ちがかどつと込み上げてきた。

* * 丹生のみち

子どもの頃、家に「おばあちゃんの鏡」と呼ぶ、古い顔鏡があつた。分厚くて重たいその鏡は、兄と私の寢室の箆筒の上に置いてあり、私はよくその鏡を床に置いて自分の顔を覗き込んだ。祖母は毎朝、保育園に通う私をバス停まで送り迎えしてくれたのだが、ある日、それは「すいぎんのかがみ」だと教えてくれた。「すいぎん」ということばに何か特別な響きがあつた。それが水銀ということばとの最初の出会いだつた。なぜそのような記憶があるのだろうか。誤つて床に落とした体温計の先から小さな銀玉がコロコロと転がりだした時も、祖母がいつしよにいた。銀の玉コロを指先で触れようとした私を祖母は叱らず、やさしく「すいぎんよ」言つた。実はあの鏡は水銀製ではなかつたかもしれない。それでも、私が九歳の時に他界した祖母との会話を想起できるのは、「じぶん」という地面に眠つてゐる「すいぎん」という祖母の声の響きが、採りだすことのできる資源になつてゐるからだろう。「すいぎん」の周りに湧き上がる想像を、たつたいま、採掘し、精錬してゐる、という気がする。

私の実家は、埼玉県飯能市、名栗川（入間川）のほとりにある。その川沿いに県道が通つていて市街地まではバスで十五分くらい。一本道の街道は、市街の入り口に差し掛かるところに信号機があり、そこで必ず車の列ができる。保育園に通つてゐた時も、バスは決まつてそこから五

十メートルのあたりに停まつた。こんもりとしたブナの樹の枝がバスの窓までくつつきそうだつた。そこに丹生明神がある。五十年たつてもその光景はまったく変わつていない。この木々の下をくぐり抜けると飯能の街だという、幼年時代の空間感覚も十分残つてゐる。名栗川に沿つて産鉄・鍛冶にまつわる地名が数多く残されているが、「丹生のみち」も私の故郷に届いてゐたのだ。

その昔、丹生の民が飯能にやつてきたことを知つたのは、自転車で丹生明神の前を通つてゐた中学の頃、母が執筆してゐた随筆『飯能歴史点描』が地元の新聞に連載された時のこと。以前、母が四十年ぶりにそのコピーを発見し、私に送つてくれた。「平安時代から丹生を治める民・丹治比氏が東国とつながりを持ち、子孫が相次いで武蔵国に下向してきた。丹生明神は高野山より勧請した氏神。夢を駆り立てる広大な新天地・東国の拓殖、開墾事業であつた」とある。詳細は忘れていたが、初めて自分の住む町の意外な来歴に触れた時のほのかな悦びが蘇つてきた。丹生のみち。それは地下資源を求めて、鉾脈沿いに集団が移動した道筋であると同時に「想像のみち」でもある。技能と道具だけではない。未知の世界へ心が向くという想像が人づてにつながる。パイオニアとは苦難と危険の道でもある。移住したカリフォルニアという私の新しい地元とも重なつてくる。

事実、カリフォルニアは日本列島に似ている。火山があり、温泉があり、鉱脈がある。古い大地の活動で熱水鉱床のあつた大地。しかし、鉱脈は地下に眠っている。外からは見えない。アルマデンの山路を歩いて、遺跡がなければ気づきようがない。鉱山師という探索のエキスパートは、まず地表に露出している場所伝いに歩いたであろう。中央構造線は断層である。断層にそって水銀鉱床が見つかった。崖にむき出しになった赤い岩石を横から見ることが出来る。実は、サンタクルス山脈は、サンアンドレス断層とよぶ、カリフォルニアを貫く大地の裂け目に沿って走っている。断層はかつて、熱水によって鉱脈ができたことの証でもある。断層があり、地震があり、露出がある。水銀という元素は揮発性が高いので地中を移動し比較的地表に近い所に鉱床をつくる。いくつもの要素が重なる所。偶然の出会いから手掛かりを得、そこに足がかりをつくつての地下に眠る資源を採り出すのである。

名栗川を下っていくと「加治」という地域があり、川沿いに阿須という名の広い崖地帯がある。谷川健一著『地名逍遙』は、万葉の歌を引きつつ、日本各地のアズという地名を紹介し「アズとは崩れた崖や崖を意味する」と説く。その中に飯能市の阿須も記載されていて、末尾に「アズには罫という造字」があるという一文が加えられている。「土へんに丹」と書いてアズ。初めて読んだ時に、私は目が釘付けになった。アズはアズキ（小豆）に転じるなど、

違う漢字が当てられる例は多いが、崖のことである。この崖の存在こそ、鉱物資源には不可欠だ。内面を直接見ることはできない。だから表出される場所を探り、垣間見るのである。同じように、「ありのままのじぶん」というものがあるとすれば、それは「じぶんという土壌」から表出する、無意識の素のふるまいに垣間見えるものなのだろう。あるいは、心の働きを伴って表出される声ことばの一瞬に響くものなのだろう。想像の鉱床から原石を採り出して抽出する過程、それは心の働きの表出する、小さなひとときを探すことなのだろう。

谷川健一先生の著作との最初の出会いは『青銅の神の足跡』である。製鉄の炉を覗く仕事は片目をつぶして「一目」や「メツカチ（目鍛冶）」となり、たたら踏みが片足を不自由にして「足引き」となる。金属精錬という特殊技能によって石や砂の霊力を引き出す不思議な物理現象は畏れられ、それは神になった。穴師を足痛と書く理由、あしひきのがやまの枕詞である理由。挙げればキリがないほど、綿密な実証的データと跳躍する想像が網の目となり、次々にミステリーが解かれていくような興奮に震えたことが忘れられない。「記紀」の伝承にちりばめられた暗喩の数々。その中でも、ヤマトタケルが水銀の毒に倒れ、足が「三重」に腫れてまがつたという古事記のエピソードと、伝承の数々（白鳥伝説）に私は、強い感銘を受け、深い共感を抱いた。

鉱物資源の精製は重労働と生命の危険を伴っている。前世紀の出来事であるアルマデン鉱山でさえも、毎年四人の鉱夫が中毒死したと言われる。地下の坑道・採掘場は、体温よりも高い気温で、湿度百パーセントという過酷な労働環境であった。水銀の気体を肺から吸いこむと人体に致命的な打撃を与える。生れながらにして啞の子ができたホムツワケ（炎から生まれた皇子）もヤマトタケルと同じく鉱毒の犠牲の上に国土の発展が築かれたという歴史を物語っている。それほどまでに危険な水銀には、多岐に渉る用途があり、経済的な価値の大きな希少資源であった。水銀は地球の地殻に存在する元素の占める割合で二百万分の一という少なさである。鉱床はやがて掘り尽されて枯渇するから、さらなる源泉を求めて井戸はより深く掘られ、坑道は地中で横に伸びていく。

アルマデン鉱山もはじめの数十年で相当な量を採掘してしまつたが、需要は増え続け、採掘できる限りの生産が長年続けられた。一九七五年に閉山するまでに、3万7千トン、プラスチック瓶で百万本の水銀を産出した。百三十五年の操業が幕を閉じ廃鉱となる引き金になったのは、一九七二年に出版された『ライフ』という写真雑誌の特集記事『排水管から流れ出る死』だった。それは「外側から客観的に写真」するという報道写真記事ではなかった。写真家ユージン・スミスは水俣の人々とともに暮らし、被害者家族との関係を築きながら共同体の内側を漆黒のモノクロ写真

真によるフォトエッセイで描いた。母に抱きかかえられて入浴する娘（「Tomoko in Her Bath」）は、四肢全身が麻痺し、目も見えず耳も聞こえない。それは、環境汚染による食物連鎖と生物濃縮によつて有機化した水銀の鉱毒が人間の中枢神経を破壊する事実ばかりでなく、公害の被害者・遺族には、何重にも重なる苦難の現実と、その中で生きる人間の勇氣と不屈を浮き彫りにした。古の昔からいのちをつないできた郷土の名前が病気の名称となり、それがさらに「救済の線引き」ということばで切り裂かれたされたミナマタ。ともに生きる人間に対しても、自然に対しても、「共感のまなざし」が偏り、欠乏する社会の現実は何人事ではない。妨害の暴行にあつて脊椎を痛め失明しながらも渾身の仕事を続けたスミス自身はこう綴っている。

「写真は小さな声に過ぎない。だが、一枚の写真が人の心に響き、遠い人々への理解や共感をもたらすこともある」。（*注 付記2）人間は、土と、水と、空気と、そして隣人とともに生きている。それらはみな、向きあい、ふれあい、心をこめて、「その身になれる相手」である。農業・水産業の盛んな当時のカリフォルニアにとつて「ミナマタのピエタ」に象徴される共感の衝撃は大きかった。レイチェル・カーソンが勇を鼓して鳴らした警鐘『沈黙の春』によつてアメリカ社会でも少しずつ目覚め始めていた、人間を超えるものへの畏敬の念と生態系へのまなざし

し。「ミナマタ」はそれをもう一步、社会の認識として定着させる後押しとなった。

*** 共感の精錬

その頃から、アルマデンの廃鉱をよそ目にして、シリコンバレーはコンピュータ・ハイテク産業の要衝として急速に発展しだした。コンピュータとは、計算する機械、手順のこと、その「ものとしくみ」である。地殻で酸素の次に豊富な元素であるケイ素を地表の砂から採りだし、それを基にして集積回路をつくる。片方向にのみ移動するという電子のふるまいの特徴を引き出して、ひたすら計算する小さな回路が組み合わされてできている。より小さく、より速く、よりたくさん。計算量は多ければ多いほどよい、微細加工は小さければ小さいほどよい、とされる。金銀や水銀などの重金属の採掘と違って、シリコンの原料はいくらでもあり、直接的な人体危険を伴う利用というイメージは持たれていない。電磁気という自然のふるまいを取り出して活かす「恩恵」の、そのまた上に、電子の粒の動きを計算回数にみなした、その働きの上に現代文明社会は築かれている。好むと好まざると関わらず、そのしくみからやって来る「特典」を受けて暮らしている。生身の人間が心身のふるまいをつくる技術はアートと呼ばれ、その拡張・延長、応用はテクノロジと呼ばれる。人間の創造性という特徴を外側に広げたものである。しかし、今やその

テクノロジが先導する現代文明の姿は、息がつまるほど性急で、著しく過剰で、実に複雑になってきている。それなのに、ふつうの日常生活を暮らす私たちにとって、人間の身の丈で想像できる範囲を飛び抜け、その姿の全体像がますます見えなくなっている。

一方、人間の「いのちのリズム」は昔から少しも変わっていない。呼吸をするひとつひとつの間合いに、何かが感じられ、何かが表される、という繰り返しのリズム。自然な身体ふるまいと、何かに触れては湧き上がる「思い」とが途切れることなく連なっている。その「連続体」が生きていることである。その「持続」そのものを、私たちは生きている。しかし、人間は、桁違いのスピードで考えたり、手足を動かしたりすることはできない。突然に大量の思考をすることはおろか、急かされた瞬間にじんわりと感じることもできない。私たちは、ひと呼吸ずつ、順に、生きていく。だからいろんな仕事を機械に「やらせる」のだといつても、結局、生きるのは自分だけである。誰もこの身の代わりに歩いたり、感じたり、夢を見たりすることはできない。だれもがみなそうである。便利で快適な生活は果てしもなく追求するものだと言われても、過剰な「供給」がいつまでも「需要」を生み出し続けるしくみが無限に続くとは思われない。そもそも、とても消化吸収のできないような摂取や、放埒で無制限の過剰を供給と呼ぶことはできない。人間には超えられないものがある。生命体の

身体は、そうしたバランスをとることによっていのちを紡ぎ、繋いでいることを、本来、私たちは身をもって知っていたはずである。現代社会は、過剰というものの姿が見えず、声が聞こえず、肌で触れて気がつくという機会がなくなっているのだ。過剰が無理やり需要を生み出そうとしていることに、私たちは無頓着で無関心で、無自覚になっっている。それを思い出すことが欠乏し、思い出す力が衰弱している。時々現れ出てきても身につかず、正面からそのひとことをあげる勇気が過剰に押しつぶされそうになる。

古来より、人間は資源の獲得をめぐる争い、発見と創造による繁栄と衰亡を繰り返してきた。文明はいつの時代もその過程であり、産物である。繁栄は過剰を生み、過剰は依存を生む。依存は惰性を生み、いつしか肝心なものが押しやられて不足する。不足は欠乏となり、最後は枯渇し、そして風化する。物の過剰、情報の過剰、意識の過剰。心のないことばの過剰で人を傷つけ、囚われた「私」中心の意識の過剰で苦しむ。その過剰の裏側にあるのは、想像力の欠乏である。過剰の代償と言い換えてもよい。過剰への依存が惰性となる時、最も肝心な「想像の営み」が失われているのだと思う。とりわけ、共感という人間の存在にあって最も根源的で本質的な力が欠乏する。共感とは、自分を重ね合わせることで、なぞられること、うつしてみることである。自然であれ、人間であれ、ものであれ、自分がむきあうとふれあい、その身になることである。遠く離れ

ていても心を寄せることができる。死に別れても、心の中に生きる人の声を響かせることができる。そのようにしてはじめて、私たちはじぶん自身という「とき」と「ところ」そのものを生きていることに気がつくのだ。共感とは、実はじぶんの在りか、存在の意味を知るためのいちばん根源的な力なのだと思ふ。ところが、心身に溢れる過剰、すなわち、意味の見出せない空気を過剰に吸い、じぶんが頼んでもいない取り沙汰に浸り、身に余る雑音を摂り続け、望んでもいない性急な勢いに身を任せることがあたりまえの世界に慣れるうちに、肝心の想像力の源泉は欠乏し、人間本来に備わった共感の力は枯渇してしまうかもしれない。思い出すことを忘れて、最後はじぶんが本当に枯渇してしまうかもしれない。ひとりの人間も、人類全体も同じことである。なぜなら、誰もがみなひとりひとり同じように、たつたひとつの、いちど限りの、生身のじぶん自身を生きているのであるから。

いつの時代も文明社会を生きるための警句は数多あり、迷わずよく生きるための知恵のことばは数え切れないほどある。想像力の欠乏？そんなこと、誰でも感じていること、わかっていることだ、という人はたくさんいるだろう。だが、頭ではわかっているはずでも、ひと呼吸の数秒が待てない、ゆずれない、ゆるせない。そういう経験は誰にもあるだろう。だからと言って、「ゆとりを持って」とか「足るを知れ」とか「日々内省せよ」と言い放つだけでは

不十分である。いや、それでは光明は見えない。「私はほどよくゆとりを持って自適に暮らしているから関係ない」とか、「毎日、忙しくて暇もあまりなく、それどころじゃないけど、それなりやっている」とか、「健康第一。技術とかよくわからないから自分は関わらないし、便利になればそれでよいのでは」とか、「自分ひとりじゃどうにもならないでしょ」と人は言うかもしれない。あるいはまた、それをさらに賢い計算で解決することが目標だ、と言う「専門家」はいるかもしれない。しかし、立てるべき問いはそれではない。今や誰もが地球全体を覆う電磁気とコンピュータのテクノロジー文明社会時代に身を置きながら、「過剰・欠乏」という表裏一体の地平に立っているのである。コンピュータが悪いのではない。ネットで調べれば何でもただで情報がでてくるような錯覚を覚えても不思議ではないほど、地球上の私たち人間の社会全体がそのような過剰を生み出す運営の上に成り立っており、それに頼って暮らしているのである。膨大な計算量もまた地球の資源が形を変えたものである。その切実な現実には、「思い出す、気がつく、感じられる」という根源的な心の働きによって向きあう以外に手はない。誰でも、よく生きること、豊かに感じられる「いま」が、かけがえのない大切さを持っているということは「知っている」。しかし、生活環境を捨てるわけにも、文明社会を自分だけやめたりするわけにはいかない。「関係ないよ」では済まされない。ではいった

い、どのようにして、この課題と向きあい、想像と共感の力を呼び覚まし、引き出し、取り出して、確かめたらよいのか。それこそが問いなのだ。

見方、聞き方、感じ方をどう変えたらよいのか。いや、そうではない。「見え方」が変わるようにじぶんを為向けることだろう。「聞こえ方」が変わるようにじぶんを手入れすることだろう。「感じられ方」が変わるように、肝心なことをいつでも思い出せるようにすることだろう。本来、人間の根源的な力とは、ないもの、見えないものを見ることであつたはず。自分の身にふりかかっていることにも思いを抱けることであつたはず。親身になつて相手に自分を重ねあわせ、心身のふるまいに映せることであつたはず。本来、欠乏したものを取り戻し、伊吹をふきかけ、じぶんの地中で忘れられ、眠つたものを呼び覚まし、そつととりだして研ぎ澄ますことは、ありのままの人間に備わつた手持ちの力でできるはずである。身辺の過剰そのものを直接取り除けないのであれば、まず、欠乏しているものを増やすことであろう。過剰から欠乏へ流れる循環を日々の小さな実践、いや、ほんのひと呼吸の間におこる想像の中につくること。その数を増やすことだろう。現代社会の価値尺度は、定められた時間の中でどれだけ多くの産出や処理ができ、得点がとれるか、という考え方だけが突出している。経済も教育も自己の評価も、成績は高いほうがよく、お金は多いほうがよく、命は長いほうがよい、とされ

る。外からものごとを測り、客観的に知ることの意義は否定されない。とすれば、「多ければ多いほどよい」ものの「見え方・聞こえ方・感じられ方」が変わるような、発想の反転をすることではないか。それは過剰な情報やハウツースキルの中にあるのではなく、ふだん相手にせずに切り捨ててしまっている、じぶん自身の小さな時間の中にある。

谷川健一先生の最後のエッセイ『生命と寿命』（『海の宮・第6号』）の中に、そのヒントがある。

「ルソーは『エミール』の一節で次のように述べている。もつとも多く生きたひとは、もつとも長生きしたひとはなく、生をもつとも多く感じたひとである。この言葉は神谷美恵子の『生きがいについて』から引用したものであるが、長生きしたからといって、多くを生きたことにならないことを痛切に指摘しているのである。では、「多くを感じる」とは何か。私見によれば、それは宇宙に脈動し遍満する生命のリズムを感受することにほかならない。」

多くを生きたとは、多くを感じることである。私はこれまで、このことばに従って「多くを感じる」ことができるような手伝いや、手助けや、支えになる「ものやしぐみ」について、独自の方法で探究を続けてきた。それは「エンパシム」(Empatheme 共感の資源・素材・単位) というアイディアに結実し、じぶん自身で「より多くが感じら

れる」というきっかけや可能性を試す日々の実践を積んできた。ありふれた日常の中の、ほんの小さなひと息の時間の中に、「宇宙に脈動し遍満する生命のリズムを感受する」という瞬間はどのようなようにして現れるのか、それを思い出したり深めたりするのか、じぶん自身のことについて、ほのかな察しがついてきたように感じられる。

それは、ただ頭で考えて出てくるものではない。突然、無からそのような状態が湧き出てくるものでもない。小さな練習がいる。助走もなく、突然全速力では走れない。準備体操をせず、いきなり演技はできない。味見もせずに、美味い料理はできない。「深く豊かに感じられる」こともおなじだろう。突然、何もせず、勝手に「感じられ方」が変わるのではないだろう。小さな素振りがいるはずである。それは手持ちの、もって生まれた素の力、ありのままの姿勢でできるはずである。練習するという構えが過剰にならずにできる方法があるはずである。肝心なことは、外から見ただけでなく、内側から見ることだろう。相手の内側になること。じぶんという土壌を相手にして、内側が見えるように、聞こえるようにすることだろう。じぶんの心身が土壌である。身のまわりの空気と相互にふれあっているもの、それがじぶん、身と心である。じぶんから、想像を採りだして精錬する。そのための姿勢を身につける。共感のふるまいを小さな素振りになるようにして、文字通り、身につけることだろう。とすれば、自然な姿勢とそのひと息

の回数が増えるように、数えられるように、思い出せるように、そのために、テクノロジーも生きる。

「想像・共感のモーメントは多ければ多いほどよい」のは、それが単にたくさんあるから、ではない。それは、小さな繰り返しをじぶんでたくさんつくる過程で、きつかけができるからである。未だ知らないじぶんという可能性が生まれるからである。その中をかけがえない宝ができる。それは、たのしみ・よろこび・わかちあいの体験ひとつひとつであり、勇気や希望や信念のことひとつひとつが生まれることである。精神的な努力が実るために、ただひたすら頑張ればよいということでもなければ、何か特別な、マジカルな力が必要だということを言おうとしているのではない。自然な私たちで、素直なじぶんの姿勢を表す時・場の回数が増えれば、その連なりが意味をつくる。ひとつひとつは、それぞれひとつに過ぎないが、連なり、繋がり、集まると、自然に重みづけや結びつけができ、そのありよう全体に意味が生まれる。自然のなりゆきに委ねるだけで、ひとつふたつみつと数えられる素振りが繰り返され、つながれば、その中へ、かけがえのないものが生まれるはずである。それは、確率的に、統計的に、数理的に、じぶんという可能性が高まると言い換えても構わない。

大切なことはたったひとつ、素のじぶんが共感するひとときを「多く」思い出し、感じることである。安らいで、

委ねて、じぶんの土壌から、想像の資源を採りだし、素材にすること。共感するというエンパシーの力を引き出し、それを「より多く感じられる」ようにはからうために、人間の英知蓄積のひとつであるサイエンスの力も、創意工夫の結晶としてのテクノロジーの力も、そして何よりも、心身のふるまいの仕方(作法)というアートの力もあわせることはできるはずである。しかし、生きるという人間のアートの手伝い・手助けとして、ともにいてくれるというテクノロジーを「過剰・欠乏」の偏りから解放するのは、人間の心によるしかない。心がけや心構えは、頭だけではできない。身につける学びしかない。本来、人間に備わった力「共感」を、ミニマル(不可欠最小限)として、それをシンプル(簡素、ありのまま)に、小さな作法化をして身につけることこそ、「過剰・欠乏」の文明社会を生きる、私たち地球上すべて人間にとって、感じられ方がかわる未知の可能性をもつ最もエッセンシャル(肝心要の、本質的)なことだと思ふ。

科学的とは、観察し、実験し、客観的に記述することである。客観的とは、「他人として」ということである。同時に、比喩的に想像し、何かに喩えて象徴的に表現することもまたサイエンスの核心にある。見えないものを観ようとする試み、そのものになりきる試みである。それは人間の心の働きそのものである。そのもののふるまいと一体化してはじめて「宇宙に脈動し遍満する生命のリズム」を感じる

する」ことができるのだろう。サイエンスの対象は物質的な現象で、それを客観的・分析的に扱うもの、フィロソフィーの対象は、精神的な本質・原理で、主観的・全体的に扱うもの、などといった区分は、じぶんを生きる作法には不要である。テクノロジは機械や装置の物質的な働きで、詩画・音楽・物語・演劇のアートは精神的な働きで、などと分け隔てる必要もない。その分断が過剰になってイマジネーションの欠乏を生む。肝心なじぶんは、心身のふるまいをもった生身の人間である。どこまでいっても私たちは人間である。すべての人間に、じぶんを投影する、写し見て、たどることのできる力・エンパシーが宿っている。じぶんを地球の土壌になぞらえ、手にした石ころにも、確率分布という想像図にも、じぶんを投影することのできる、不思議な力を、共感の資源として備え持っている。いちばん大切なことは、人間が編み出してきた力を活かすための創意と、素(ありのまま)のじぶんに向き合う小さな勇気だ。じぶんの小さな「いま」という素振り練習の機会を増やすことである。そのためにこそ、私たち人間による、いろいろな探求と創造の営為を結びあわせていかなければならない。

*** 結び

アルマデン水銀鉱山探訪から、私自身の「丹生のみち」がひらけ、その路を「丹念に」たどってみた。アルマデンを後にした時、まだどのような展開になるかはつきりとは

わからなかったが、なりゆきに委ねてその路を進んでいくうちに、心の中の「すいぎん」が採りだされ、精錬されたような思いがする。水銀は希少な鉱物資源であり、不思議なふるまいをする物質であり、人間社会に大きな打撃と、貴重な学びをもたらした鉱毒でもある。恐ろしい有害物質がもたらした震動を、自分自身のどのようなアナロジーによつて表現したらよいのか、少し迷ったが、素のまま綴る以外にはなかった。しかし、よいもの、わるいもの、という人間の尺度で、自然はつくられていないはずである。人間のことばは、人を励まし、助ける一方で、人を傷つけ、殺すこともある。人間にとつて、ことばの過剰と欠乏は水銀のような強烈な物質の働きをすることもある。持てる力を活かして、私たちはじぶん自身と向きあう必要がある。現代の文明社会・地球時代をよりよく生きる手がかりは、すべての人の、じぶんの中にある。誰ひとり、ひとりで世界を変えることはできない。でも、誰でも、ひとりでじぶんの世界が変わつて感じられるように、想像し、共感し、行動することができる。思いが精錬されると実感に変わる。その時にこそ、「きつかけ」ができる。じぶんを資源として、きつかけは後から遡つてできる。その縁をもとにして新しい源泉ができる。そして、ひとりのじぶんが資源になり、素材になり、未知の可能性になるという循環の回路を、みんなとともに歩むことができる。ひとりのじぶんは、ひとりだけではないのだから。

数年前、錬金術に晩年のすべてを投入し膨大な研究を残したニュートンの手稿が公開された。近代科学の父・

ニュートンは、デカルトとともに合理客観主義の源流とも言われるが、怪しげで魔術的という偏見のレッテルを貼られた錬金術に生涯の探究を試みたことは、どこかタブー的な扱いを受け、裏舞台の話に扱われてきたように思われる。それは、水銀による実験工房で、ニュートン自身も鉱毒の影響を受けていたことが知られるからだ。だが、いのちのふるまい、遷移・循環する自然の原理の探求に、分け隔てはなかったのだらうと思う。実際に試みるからこそ、じぶんの「心を観る」ことなのだろう。「過剰・欠乏」もまた、人間の心から生まれてくる。ほんのすこしでもいい、小さな力でそれを循環に変えることがきつとできるはずだ。「多くが感じられる」ためには、素のふるまいで共感が引き出される環境がじぶんの周辺につくれるようなアイデアが不可欠である。その思いに駆られて、私はこの七年あまり、『海の宮』というエッセイ（試み）の数で数えらるると十数冊分の日々を過ごしてきた。そして今、ついにそれを「共感素のコミュニケーション」という試みに結実させる時が来た。エンパシムとは、身心の素のふるまいを写す「共感の素」という意味である。その試みに参加し実践している方々のおかげで、「共感の資源」を探究としても、社会支援としても捧げることのできる成果につながった。

私にとつてはそのすべてが谷川先生へのオマージュであり、その証としてこのささやかな一編を捧げたいと思う。

「付記」 注1

アルマデン水銀鉱山の博物館で鑄鉄の釜を見て、帰宅して私はまっさきに「日本書紀・神武紀」と読み直してみた。七千文字足らずで磐余彦の生涯が簡潔にまとめられている。その中に、国を治める祈願のことばある。原文をそのまま引き、傍線を加えた。

「吾今當以八十平瓮、無水造飴。飴成、則吾必不假鋒刃之威、坐平天下。」乃造飴、飴即自成。又祈之曰「吾今當以嚴瓮、沈于丹生之川。如魚無大小悉醉而流、譬猶枝葉之浮流者枝、此云磨紀、吾必能定此国。如其不爾、終無所成。」乃沈瓮於川、其口向下、頃之魚皆浮出、隨水喚啣。」（「水を使わずに飴をつくってみせる。もし飴ができたなら、武力を使わずに天下を平定できるだらう。」おのずと飴ができた。丹生の川に嚴瓮（かめ）を沈めてみる。魚が酔っ払うはず。そうであればうまくいく。そうならなければすべて失敗する。するとそのとおりになり、魚が水上に浮かび、喘いだ。）

水無くして飴が自然にでき、飴の入った甕に川の水につけると魚が死ぬという。飴は水銀の比喩であろう。万葉集には何首も「纏向の痛足」ということばが出てくるが、その現場を思い浮かべることができる。嚴瓮とはどんな容

器なのか調べてみて驚いた。先の尖った甕である。水冷還元で貯められる水銀の容器は、釜の下で地面にしつかりと置かれたのではないだろうか。アルマデンの博物館でひらめいたことだが、谷川先生の、「あらゆる文化現象は、それを象徴的にしか表現できないとするのが私の考えである」(「青銅の神の足跡」)のことばを思い出した。水銀ということばもはじまりは比喩である。丹生のみちも、文を象徴的に表現して人間の根源にたどり着くひとつの方法かもしれない。

「付記」 注2

ユージン・スミスの写真集を見せてもらった鮮明な記憶がある。それがいつのことだったか、確かめたいと思っている(母の日記に手がかりが残っていたらだが)。若い頃、谷川先生の著作に出会って間もなく、先生の故郷とも「丹生のみち」ができていたのだろう、スミスの『MINAMATA』に出会った。いま思えば、自身の発明・研究開発・制作・創作を支える想像の源泉がスミスのことばと深い縁を持っていたことに気づかされる。原文から抜粋して引く。

Just sometimes - a photograph or photographs can strike our sense into greater awareness, and as catalyst to emotions and to thinking, into a greater sense of understanding and compassion.

Photography is a small voice. I believe in it.

私の思いも同じである。ただ、私の試みが共感を呼ぶかもしれないという以上に、誰もがじぶんのひとときで、じぶん自身に共感し、きっかけと可能性を生み出せるような手助けになりたい、という思いが強い。

「付記」 注3

共感とは、他者へ理解・支援としても、学問やものづくりにも、不可欠である。しかし、共感という複合的な心の事を科学的に捉え、そこで生まれる情報を探究し、活用するというアプローチはこれまできなかつた。そこで私は、場や相手に自己を結びつける共感(Empathy)が発揮される時の小さな事象を単位化して捉え、それを「あるてにふすいま」という八つの「共感素」として音・色・形・記号で視覚化し表現するコンセプト「エンパシム

(Empatheme)」を考案した。身心が身辺と親和する場、共鳴する間を創出し、そこで自然に促される素朴なふるまいの表出を写す。それを「じぶん情報」として活用する技術的方法と、人間の心理に十分配慮した環境づくりと日常における簡単な作法プロセスを組み立てた総合メソッドを編み出して、社会的な実践と研究の環境を整えた。その活動全体が「エンパシム・コミュニテイ」である。内なる声をそっと写し、身心に共感するきっかけをつくる。ひとつぶの共感素が、じぶんと同じような「他の身

心」との共感の素にもなる。その営みを、サイエンスの力、テクノロジーの力、アートの力、そして、共感の力の調和によって支援することができる。その信念をこのエッセイにこめた。スミスの「フォトグラフィ」に倣って言うならば、共感素の写しは「エンパグラフィ」と呼べるかもしれない。私はその「未知の可能性」を信じている。





写真

左から右へ

- 1 サンタクルス山脈・ブナの林
- 2 アルマデン水銀鉱山とシリコンバレー地図
- 3 イングリッシュタウン校舎跡
- 4 水銀精製装置
- 5 水銀精製鑄鉄釜
- 6 たなと・えんと・エンパグラフィ